

アルテ・コンボ新作CD「旅日記」は、バルカンからアジア国境に渡る、民俗伝統音楽の要素を伴う様々な国の音楽の旅へご紹介いたします。稀でオリジナリティ溢れる音楽は、今回初録音のものばかり。それに加え、2012年に誕生100周年になるジャン・フランセへの記念の気持ちを込めて、彼の木管五重奏第一番を録音しました。新鮮な風と共に、素敵な旅を！

マルコ・タイツェヴィッチ(1900-1984) : 七つのバルカン舞曲(1926)

マルコ・タイツェヴィッチはオシエク(現在のクロアチア)生まれの作曲家、ヴァイオリニスト。1945年から1966年、ベオグラードの音楽アカデミー講師を務めるなど、教育者としても名高いと同時に、合唱の指揮者としても精力的に活動を行った。様々な編成の為に50曲以上の作品に加え、音楽理論の書籍なども多く残している。

七つのバルカン舞曲は、彼の作品の中でも最も重要な作品で、彼が実際に影響を受けたバルトックに匹敵するとも言われた。東ヨーロッパ(セルビア、マケドニア、アルバニア、スロベニア)の民俗音楽の特徴: 舞踊のリズム、東スラブの憂愁を帯びた精神などが凝縮されている。原曲はピアノソロの為に作曲され、ショット版より出版されたが、その後オーケストラを含むあらゆる編成の為に編曲がなされた。

本録音は、ダビッドウォルターによって木管五重奏の為に編曲されたもので、今回がアルテ・コンボによる初録音である。

ジャン・フランセ (1912-1997): 木管五重奏第一番 (1948)

ジャン・フランセは、フランス・ルマン生まれの若い時期から活躍した作曲家。

モーリス・ラヴェルはフランセの少年時代に、彼の両親に次のように述べている。「この子の才能のうちで、私が見る限り、一人の芸術家として最も将来が有望視されるのは、旺盛な好奇心に恵まれているということです。」

ピアニストでもあるジャン・フランセは、多数のピアノ曲の他、オペラやバレエ音楽、50曲以上にわたる室内楽作品を残しており、世界的に非常に頻りに演奏されている。また、サシャ・ギトリの映画「ヴェルサイユ語りなば」他、映画音楽も多数作曲しており、全てを合わせると200以上の作品に及ぶ。

尊敬していた作曲家 プーランクの作品にも見られるように、自由で軽快で、時には気まぐれなフランスならではの作風が、この木管五重奏曲にもよく表れており、想像力を豊かにさせてくれる。

ベシヤラ・エル・クリ (1957-) : 木管五重奏曲作品46「主題のない変奏曲」(1988)

フランコ・レバノンの作曲家、詩人でもある、ベシヤラ・エル・クリ は、レバノンの首都ベイルート生まれ。彼の芸術活動は早い時期から始まっていたが、本格的な勉強が始まったのは1969年以降レバノンにて、その後1979年、作曲家としての技術を本格的に高めるため、パリに渡る。

1975年の年のレバノン戦争において、その記憶の意味を込めて、1985年に 交響曲作品37「ベイルートの廃墟」を作曲している。

彼の作品は現在80曲以上に及び、そのほとんどがMax Eschig社、Durand出版、Alphonse Leduc社から出版されている。オーケストラの為に全4枚の録音CDは、2006年から2007年、2008年に「The Penguin Guide to CDs and DVDs」の中で三つ星を獲得した。

彼の音楽は、フランス国立管弦楽団、ロンドン交響楽団、パリ管弦楽団、イスラエル室内管弦楽団、モスクワフィルハーモニー管弦楽団、デトロイト交響楽団、レバノン国立交響楽団など、世界各国で演奏されている。

ベシヤラ・エル・クリ の作風は、20世紀のフランス音楽の影響を受けつつ、彼の根源である近東の音楽はもちろんのこと、ロシア・東欧のロマン主義の音楽からも、間接的なりとも影響を受けている。

1988年にパリで作曲され、同年にMax Eschig社により出版公開された、木管五重奏の為に「テーマのない変奏曲」は、1997年にイスラエル・テルアビブで作成されたもので、今回が初録音。

久留智之(1955-) : 3つの木管楽器と 3つのバリィンの為のクラップ・スラップ・トレンブル(2005)

東京生まれ。東京芸術大学大学院作曲科修了。同大学院在学中にイタリア政府給費留学生として渡欧。ミラノ G・ヴェルディ音楽院作曲科及び指揮科にて学び、ローマ・アカデミア・聖チェチリア作曲科修了。

広島大学大学院教育学研究科助教授を経て、現在、愛知県立芸術大学教授。アンサンブル「アッカ」芸術顧問。日本音楽著作権協会、日本現代音楽協会、民族芸術学会、各会員。

最近では民族音楽の中にある音楽の根源的なパワーを抽出し(たとえば民謡の発声やコブシなど)、バロック的修辞法を用いて洗練させるような方向性を持つ作品が多い。また、環境問題などをテーマに常に時代と対峙しようとする姿勢をもっている。

楽譜は、全音楽譜出版、JFC出版、Mieroprint(ミュンヘン)、マザーアースなどから出版されている。CDは、現代日本の作曲家「メリー・バクテリア・ミュージック 久留智之作品集」がフォンテックからリリースされている。

クラップ・スラップ・トレンブルは、長い伝統を持ち高度に発達した西洋音楽と、その美学に沿ってメカニカルに改良を重ねた西洋楽器に対する小さなアンチテーゼである。

具体的には、3つの方法論が試みられている。

1.非常にプリミティブな楽器(フィリピンの竹製打楽器バリンビン)と西洋のメカニカルな楽器(フルート、オーボエ、クラリネット)との併用。

2.ジェスチャーや掛け声(日本民謡の「コブシ」や「掛け声」)などの応用による生命力のある有機的音楽の追求。

3.人間の感性の本来性の回復への一助として「繰り返すこと」「振動すること」の重視と再考。

「繰り返すこと」:アフリカのポリリズム、ペンローズ・タイリング(物理学者ペンローズの考案した非周期的増殖を繰り返すタイル貼り理論)

「振動すること」:インドネシアのガムランの「うねり」の応用。倍音の重視。非可聴音域へのイメージネーション。

広島現代音楽アンサンブル「アッカ」の委嘱作品、フランスにおいては、2010年5月ブルターニュ地方グロメル国際クラリネット音楽祭において、アルテ・コンボによりヨーロッパ初演公開され、反響を呼んだ。

ジャン・フィリップ・カルヴァン (1974-) : クレストット(2007)

フランス研究・教育者でもあるジャン・フィリップ・カルヴァンは、ハートフォード大学(アメリカ)にて作曲を学び、ヤナキス音楽研究所(CCMIX)、イルカム(フランス・パリ)にて作曲を研究。室内楽などに加え、大規模なオーケストラのための作品にも多く取り組んでいる。

コヴェント・ガーデン王立歌劇場・レジデンスメンバーでもあるジャン・フィリップ・カルヴァンは、ウジェーヌ・イヨネスコの処女作である戯曲「禿の女歌手」の歌劇の為の作曲委嘱により、2006年にロンドンにて初演される。その後、米国ツアーを前に、2009年春にはアテネ劇場(パリ)にて再公開される。

ニューヨークのクラリネット奏者、デヴィッド・クラカウアーとラムルー管弦楽団の依頼によって作曲された「カドツシュ」は、2009年11月にシャンゼリゼ劇場(パリ)にて初演される。

現在RCM英国王立音楽大学教授。

クレストットは2007年9月にアルテ・コンボによりパリにて初演され、今回が初録音。

ニーノ・ロータからバルトーク、そしてユダヤ人のユーモアがふんだんに組み込まれている。彼の独特な書法技術により、演奏者そして同時に聴衆にとっても、自由開放的で気ままに楽しい音楽を感じさせる。

クレズマーの音楽の特徴でもある、スピーディーで激しいダンス音楽とゆったりとしたテンポのバラードで構成されている。

I. ゲフィルタ・フィッシュ

本来ゲフィルタ・フィッシュとは、主要なユダヤ教の祝祭を祝う際に出される、贅沢な鯉の詰め物料理の意味。この楽章では、調和や模倣によって、突発的な新しい音への管楽器の可能性の追求が試みられている。

II. ユダヤ人の村行列

即興的なゆったりとした自由な旋律から始まり、少しずつリズムが加わる。そしてあたかもある結婚式の日に、音楽家達が演奏をしながら村の中心にゆっくりと行進していくように、そのリズムが継続していく。

カラフルな刺繍のように旋律が混ざり合い、後半フルートとホルンの響きによって導かれる。

III. ホラ&マゼル

ホラ(ルーマニアの伝統舞踊)にあるような混ざり合う不規則なリズムと共に、イディッシュ祭を祝う快活で歓喜な音楽。マゼルの由来はヘブライ語で「おめでたい出来事の際に呼び掛ける言葉」。